

越谷神明縁起

「越ヶ谷領の神明下村に関する縁起」の意。

夫レ絶へタルヲ繼ギ、廢タルヲ興ス者ノハ、

洪業・大きな事業。

先人之功ヲ拯ヒ、洪業之轍ヲ輔クル祖也、

武王・周王朝の祖。姓は姫、名は発。

武王之祀公ヲ封シテ夏ヲ祀ルカ如キ、絶タル

祀公・「姫公」、武王をさすのか。

ヲ繼ク之祖ニ不スヤ、邪 沛公之魯ニ過ツ

沛公・漢の高祖が帝位につかない時の称。

テ孔廟ヲ禮ルカ如キ、廢レタルヲ興ス之祖ニ

魯・中国古代の国の一つ。孔子の生国。

非スヤ、耶 新夕神廟ヲ造立シ、社稷

社稷・五穀の神の祠。

ヲ築ク者ハ、子孫之永安ヲ欲ス也、今マ當

元和・一六一五〜一六二三年。

社之中興ヲ原ヌルニ、元和年中、曾田氏

安頓・落ち着くこと。

政重曾テ官吏伊奈氏ニ仕ヘテ、此ノ村ニ安

乎・・・読まない字、置き字。

頓ス乎、大沼之濱リフ檢視シテ、偶 力

濱りゆう・砂浜。

ヲ竭シ心ヲ勵シテ、草萊ヲ闢キ、井地ヲ

草萊・草原、荒地、未開の地。

廣メ、邑ヲ分チ、圃ヲ種ヘ、河ヲ決リ、溝

圃・畑、「なえ」と読ませているのか。

洫ヲ疏シ、往ヲ送り来ヲ迎テ人馬之橋ヲ

溝洫・溝や堀。

濟シ、桑麻之時ヲ計ツテ、民ヲ使シテ、農隙

農隙・農事のひま。

之暇マヲ窺ヒ漁梁之業ヲ設ケ使シム、是

漁梁・漁業のことか。

以テ數村茅屋榮ヘ四境雞犬聞フ、上ミ其勲勞

茅屋・茅葺屋根の家。

有ヲ賞シテ、於新墾田ヲ官領ス、號シテ七

雞犬・鶏や犬。村が盛んなこと。

左新田ト謂ふ、政重之名ヲ取テ、永ク其ノ

於・・・読まない字、置き字。

功ヲ忘レ不ルコトヲ示スト也、此ノ村ノ中チ

官領・おおよけの領地。

だいえんじゅあ より こうせいのならわし さいかちしんでん
大槐樹有ルニ因テ、後世之俗、槐新田ト

ししょう あやま こうこう ししょうこう こしまきむら
稱スルハ誤レリ矣、郷ノ小號ヲ越卷村・

おおまのむら いう まさしげかいこんのちなり こ ちはじめ
大間野村ト謂フ、政重開墾之地也、斯ノ地初

てら た たすうけい さい より かんしよういん
テ寺ヲ建ツ、田數頃ヲ裂ヒテ、因テ觀照院ト 頃・・・中国の地積の単位。

なづ にちえいざん ぎょう しそんあいつぎ そ おくりな
名ケ、日英山ト號ス、子孫相ヒ繼テ其ノ諡

わす ざ あらわ か めいじ びようえいの
ヲ忘レ不ルコトヲ彰ハシ、且ツ命シテ廟裔之 廟裔：廟は靈屋、裔は子孫という意味か。

きがんじよ な こ ほかまんぞういんみよりゆういんの にじ
祈願處ト為ス、此ノ外滿藏院妙柳院之二寺 滿藏院：越卷村（現在の新川町）にあり。

あ ぶ したがい でんゆう のぞ かんしよういんのりゆうは
有リ、分ニ隨テ田圍ヲ除キ觀照院之流派 田圍・・・田の区域という意味か。

な しんでんのうちおおぬまのかたわら じんじやあ
ト為ス也、新田之中大沼之側ニ神社有リ、 也・・・置字。読む時は「なり」となる。

あいつたうむか とつかのじょうしゆこみやましじようしん
相ヒ傳フ昔シ戸塚之城主小宮山氏淨心 大沼・・・綾瀬川の現・新一の橋あたりから

たたかいま こ ち し べうじん より
戦ヒ負ケテ于此ノ地ニ死ス、郷人ト因テ 武蔵野中学校にかけて広がっていた。

やしろ た ものふだいまようじん とう へ
社ヲ建テ武主大明神ト號ス也、年ヲ經テ 于・・・読まない字、置き字。

の こいこいこ はいふく まさしげ ものふなが
後チ咸ク廢覆ス矣、政重、乎武主永ク 武主・・・「ものふ」と読むか。現在の沼

すた いた た きふ そう おい
廢レンコトヲ痛ミ、田ヲ寄附シ僧ヲ置テ の兵神社（大沼大明神）をさす。

いちしようしや むすび こ むらのちんじゆ な そ
一小社ヲ結ヒ、此ノ村之鎮守ト為ス、其 新編武蔵風土記稿では「兵主」。

の こ まさつらあ つぎ そうけんた えず こ
ノ後チ子政連相ヒ嗣テ創建絶へ不、是レ 累歳・・・年を重ねること。

またちゆうこうなり るいさいうすいのとぎ かずかずこうろうやま
又中興也、累歳雨水之時、數浩潦山ヲ 浩潦・・・「浩」は、水の広々としたさま、

なつかし おか のぼる いえど しやちはんぼん
懐キ丘ニ襄ト雖モ、社地汎汎トシテ 「潦」は大雨であふれ流れる水。

しず ず すいてい いま いたり ずいちようあ
兮沈マ不、水底ニ今ニ至テ瑞徴有リ、 兮・・・読まない字、置き字。

あ あきなるかな ここ じ た これ より いよいよ
嗚呼奇哉、茲ノ神ン、民ミ之ニ依テ彌 瑞徴・・・めでたい前兆。

磬折シテ懼不トイウコト此ノ時自り新田

磬折・立つたまま腰を前方に折り曲げる敬礼。

・神明二村之僧祝恣マヽニ寺ヲ譲リ社口

僧祝・僧や祝(神官)という意味か。

ヲ授ルこと能不、偏へニ命ヲ於曾田氏ニ

聆ク、且ツ環堵之中一寺ヲ構へ、觀世堂ヲ

環堵・家の周りの垣根。

建ツ、名テ政重院ト謂、政重之諱ヲ

觀世堂・觀世音菩薩を祀る堂のことか。

以テ寺號ト為シ、累世子孫之祠堂ト為ス、

累世・代々。

墾田之民ミ渾へテ乎此ノ寺ニ祈願ス也、

政重院・会田七左衛門家の南東にある。

中古之時ニ逮ンテ、四町野村之長、政重與

令命・命令の意味か。

神明村之令命ヲ司リ、兼テ此ノ社口ヲ守

鬻・ひさぐ、売る。

ル、其ノ後チ歳月ヲ經テ田畝ヲ於政重ニ鬻

田畝・田畑(でんぱた)。

テ、宮事ニ關不、寛永十九年壬午、

寛永十九年・一六四二年。

政重宗族之永鎮為ルヲ于寶殿ヲ再興シ、因テ

宗族・一族。

祝金太夫ヲ使シテ宮ヲ守ラ使ム、此ノ地

永鎮・永久の重鎮という意味か。

陜隘ニ而往還ノ為ニ黷見ルヽヲ心ニ銘シ

陜隘・狭隘(きょうあい)。面積が狭い事。

テ忘レ不、將ニ地ヲ廣メ宮ヲ遷ント將、

而・置字。読むときは「して」「ども」。

既ニ寢テ席ヲ安セ不、食トモ味ヲ甘セ不、

夏月・夏の月。

夏月之暇マ裸裎シテ流レニ投シ、或ハ沈ミ、

裸裎・はだか。

或ハ浮フ、日ヤ居、月ヤ諸、筋骨ヲ勞シ

一簣・一つのもっこ。それに盛った土。

テ泥土ヲ舉ルコト也歳シ尚シ矣、竟ニ一簣ヲ

「一簣の功」(最後のちよつとした骨折り)

覆自リ、島洲之形チヲ為シ、渚サヲ廻ツテ

隙・すき。すきま。

これの うれの うえ いまだな ぎ またそ げき
楡キヲ植へ、未夕成ラ未ルニ又其ノ隙トシテ 澤畔・・沢のほとり。

み ろじょうのつちくれ ひろい あるい たくはんのがれき
瞰テ路上之塊ヲ撫ヒ、或ハ澤畔之瓦礫ヲ 袖にして・・物などを袖の中に入れて。

そで かざん きす せんかぶのつつじ う そ
袖ニシテ假山ヲ築キ、千株之躑躅ヲ樹エ、其 假山・・築山。

えだはほうつ しるべ ならべ いただ まど
ノ枝葉繁鬱シテ乎標ヘヲ並へ、巔キ圓カニ 蘩鬱・・繁茂の意味か。

な やまがた すいびるいろい あた
シテ猶ヲ山形ノ翠微巔々トシテ恰ナ(「カ」か) 翠微・・薄緑色のひえびえした山気。
くぎのびたい ほうふつ

モ九嶷之眉黛ニ彷彿タリ乎、固トニ觀ツ(「ル」) 九嶷・・中国の九嶷山のことか。

べ そ し いけ ほ なが おび けいこく
可シ也、其ノ下モ池ヲ掘リ流レヲ帯ヒテ溪谷ノ眉黛・・まゆずみ。

だんきよう わた まいしろうづき ちゅうじゅんたんかしやくしやく
断橋ヲ渡ス、毎歳卯月ノ中旬丹花灼灼ト 断橋・・とぎれた橋、こわれた橋。

さんざん や がごと らいおうのだんじよ まえにわ
シテ兮三山ヲ焚クカ如シ、来往之男女乎前庭 丹花・・紅色の花。

むらが つつじやま こ
ニ羣リ家ヲ忘レテ日ヲ送ル、躑躅山ハ殊トニ 灼灼・・花が盛りのさま。

さいげつ つみ じごな いえど またしゅうしよのこう
歳月ヲ積テ而後成ルト雖トモ、亦洲渚之功 来往・・往来。

いって もつ だんじよう きす あたわす こ ゆえ
一手ヲ以テ壇場ヲ築クコト能不、是ノ故ニ 而後・・「爾後」の意味か。

みや うつ およはず むなし おく とし すで こころぎ
宮ヲ遷スニ及不、空ク送り年ヲ既ニ志シ 洲渚・・洲のなぎさ。

あり いまだとげす ぼつ かなしきかな それ
有テ、未夕遂ケ未シテ没シヌ、悲哉、爾ヨ 壇場・・壇の設けてある場所。

きた しじゅうよねん へ みややぶれ かぜおく
リ来シテ四十餘年ヲ歴テ宮毀テ而風屋ヲ

ひろがえ あめそいで ひかげしろ もらし まさ はいつい いた
飄ヘテ雨漙テ而晷白ヲ漏テ將ニ廢墜ニ到シ 廢墜・・廢はすたれる。墜もすたれる。

す かんぶんねんちゅうつちやたじまのかみはじめ こ さと
ト將矣、寛文中土屋但馬守始テ此ノ里ヲ

さいち てんなのはじ そ こそがみのかみ あ
采地ス、天和之初メ其ノ子相模守ニ抵テ、 采地・・領地。知行所。

はふりだいきよういんこ みや そんばい なげかわ みんなりふくだ
祝大行院此ノ宮ノ損廢ヲ嘆シ、民吏福田 吏・・役人。

し つげ そうそう こいねがう り またけいふく いた
氏ニ告テ于草創ヲ冀フ、吏モ亦傾覆ヲ慘ム、 傾覆・・国や家がつがえること。

是ニ於テ主人ニ勸メテ於神廟ヲ作シコトノ

請ヒ、主ヲ使シテ乎金數兩ヲ獻納セ使ム、

之二依テ、一家ノ輩ヲ分ニ應テ各助力ヲ

加フ矣、 粵 明年 壬戌之春相ヒ議ノ

地ヲ於曾テ泥ヲ掲クル坻ニトシ、 水涯葦柳

之間ヲ築キ、竟イニ巫覡之志ヲ遂ケ、

于神宮ヲ營マンコトヲ謀ル、 礎ヘ未タ成

ラ未、 而相模守國ヲ易ヘテ駿州田中ノ城ニ

移ル、 吏も亦之ニ從ヒ行ク、 天和三年ニ迨

ンテ政重之孫政信一ヒ乎相模守之基業ヲ追

ヒ、 且ツ于太祖之再復ニ感シテ於數金ヲ奉納

ス、 季春之央乎新廟ヲ造建ス、 壮麗于舊キ

ニ賢リ、 郷俗之邑長近隣之村民ニ臻ルマテ

微力ヲ焉加ヘ不トモ無シ、 既ニ宮成ルニ因テ、

權輿ヲ於郷民ニ問ヒ、 將ニ此ノ記ヲ作ラント

將、 古老ノ曰ク其ノ濫觴何レノ代ト云コトノ

知ラ不シテ 俗傳フ、 洪荒之世、 遠近之原野、

渾ヘテ湖海之中ニ在リ、 眇トシテ乎一字無ク、

旅舶滄浪ヲ凌キ、 輕槎乎洋海ニ淼フ、 漁舟

欸乃之聲波ヲ凌キ、 終日網ヲ挽ク、 是ノ故ニ

明年壬戌・天和二年（一六八二）をさす。

ト・・うらない 水涯・・水のほとり。

巫覡・・神に仕える人で、女を巫、男を覡。

田中城・・静岡県藤枝市にあった平城。

天和三年・・一六八三年。

基業・・基礎となる事業。

再復・・旧に復すること。

季春・・春のすえ。

郷俗・・・村の風俗の意味か。

權輿・・事の起こり。発端。

濫觴・・物事の起源。

湖海・・湖。

眇・・・きわめて小さなさま。

舶・おおぶね。 滄浪・青々とした浪。

槎・・いかだ。 洋海・・海洋。

欸乃・・櫓のきしる音。

いささ だんじよのす べ な か ひとたばのぼうしやな
聊カ男女之栖ム可キ無ク、且ツ一束之茅社無

茅社・茅葺の社。

シ、漸ク浮洲之宮地有、焉ニ存ス、其ノ後

十一年ヲ歴テ水勢稍衰ヘテ近隣村ト為ル、

俚・いなか、いやしい。

是ニ於テ俚民一小社ヲ結ヒ神ノ號ニ應シテ

叢葬・草むら。

此ノ地ヲ於神明村ト名ク、然リト雖トモ皆

泥濘・ぬかるみ。

叢葬之中ニシテ兼葭於泥濘ニ茁、楊柳乎

楊柳・柳。

澤畔ニ繚乱ス、菅茅蒻々トシテ兮、蹊ヲ失ヒ、

繚乱・入り乱れるさま。

菰菖蘩殖クシテ兮水涯ニ塞ル、纒力ニ稼穡

菅茅・スゲなどが繁茂のさまの意か。

之勉メヲ催スト雖トモ、常ニ跋涉トシテ事ヲ

繁殖・「繁殖」のことか。

用ヒ、未タ商賈交易之巷タ有ラ未、且ツ此ノ地

稼穡・耕作。

猶ヲ荒川之邊ヲ而激流 數 田園ニ漲リ江村

商賈・商売、商人。

ニ溢ル、之ニ因テ民ミ暫クモ安息スル所無シ、

江村・大河または入り江に沿った村。

是ノ故ニ伊奈氏備前ノ頭曾テ民之憂ヲ嘆シ、

備前ノ頭・伊奈備前守忠次をさす。

長塘千有余間ヲ築キ、秋水之汜濫ヲ防テ

塘・堤。

人家始テ平安也、近年ニ抵テ神前之側ニ

秋水・秋季の洪水。

大木五六株有、其ノ遺蹤也、然トモ今マハ

遺蹤・残された跡、遺跡。

枯朽ト為ルト矣、或ノ曰ク此ノ外力檢證無

枯朽・枯れ朽ちること。

コトハ則 政重ヲ以テ開基ト為セハ可ン哉、曰

檢證・「檢証」という意味か。

ク然リ、抑 四十餘年之昔シ廢タルヲ興ス者ノ

ハ政重ニ非ス耶、此ノ宮ヲ守ル者ノモ亦其ノ

ひとなり 隣のりりんのこんでん ひら
人也、面 隣里之墾田ヲ闢キテ而、群民之 行路・行く道。

こうろ とお しんめいのらいけい ひらい もつ ひおく
行路ヲ通シ、神明之来詣ヲ開テ、以テ比屋ヲ 来詣・「来る」ことをうやうやしくいう語。

にぎ も ちゆうこうのひと あらず なんぞ や
賑ワス者ノハ、中興之人ニ非シテ何ソ哉、 比屋・家屋の立ち並ぶこと。

こ かみたまたま へきろうのち あんちん きようとうこれ
此ノ神 適 乎僻陋之地ニ安鎮シ、郷黨之ヲ 僻陋・土地柄が田舎びて風俗いやしい事。

そんすう いま いたり のうふことごと さかえ またはなはだ
尊崇ス、今ニ至テ農夫 悉 ク榮ヘテ又酷タ 郷黨・同郷の人々。

すいかんのくるし な か かいぼうのそうぞく またるいせ
水早之困ミ無ク、且ツ開畝之宗族モ亦累世 水早・「水旱」（洪水と日照り）の意味か。

さいわいあり さいがいのうれい かか ず こ みなしんめいの
福ヒ有テ災害之憂ニ罹ラ不、是レ皆神明之 宗族・一族。

ずいげんなり まさしげがくんろうあげ はからうべか ず なに
瑞験也、政重之勲勞勝テ計フ可ラ不、何ヲ 瑞験・めでたいしるし。

もつ きそのはじ な がいあらんや ゆえ
以テカ基礎之始メト為スルニ 害 邪、故 勲勞・勲功。てがら。

わ かんがえ こきんのぎ さぐ でんその
ニ吾レ考ヘ於古今之義ヲ探リ、乎田祖之 勝て・こぞつて。

きろう といただ けんぎのまどい さし もつ
耆老ニ訊質シ、嫌疑之惑ヒヲ諭シテ、以テ 耆老・六十から七十歳の老人。

こ き つく より まさしげ もつ きてんのそ
此ノ記ヲ作り、仍テ政重ヲ以テ起碯之祖 碯・いしずえ。

こうせい か りつしいっぺん のこ か りつし
ト後世ニ且ツ律詩一篇ヲ貽ス、且ツ律詩

いっぺん ならべ もつ みやな のおもむ よみ
一遍ヲ并テ以テ宮成ル之趣キヲ嘉ス、 嘉す・よみする。よいとしてほめる。

そ し いわく
其ノ詩ニ曰

ふる あらた あしわら きず
故キヲ改メテ蘆原ヲ築キ 蘆原・葦の生えている原。

とき えらんでだいじん やすんず
辰ヲ擇テ太神ヲ安ス 太神・・・大神、おおみかみ。

ふそうこく はじめ かたど
扶桑国ノ甫ニ象トリ 扶桑国・日本国。

あわじしま みなも じゅんず
淡路島ノ源トニ準ス

ちから あわせ きょうぞく つの
カヲ勦テ郷俗ヲ募リ

郷俗・・・村の風俗の意味か。

たくみ はげ ていぎん いとな
工ヲ勵マシテ堤垠ニ營ム

垠・・・きし、がけ。

むなぎ か ほくと かかげ
棟キヲ架シテ北斗ヲ撃ケ

北斗・・・北斗七星。

いしずえ かた けんこん た
礎ヲ堅メテ乾坤ヲ立ツ

乾坤・・・乾坤一擲の意味か。

ひ そうめい とく かがやか
日ハ聡明ノ徳ヲ曜シ

つき やた ひかり みが
月ハ八咫ノ輝ヲ磨ク

八咫・・・長いこと、巨大なこと。

ながれ すすい さいかい さかず
流ニ湫ヒテ齊戒ヲ觶クシ

觶・・・さかずき

みてぐら ほうじ てんそん あおぐ
幣ヲ奉シテ天孫ヲ仰ク

幣・・・幣束。

まろうど おく みやまえ やなぎ
客ヲ送ル宮前ノ柳

こま つなぐ がんばん かき
駒ヲ繫ク岸畔ノ垣

岸畔・・・岸のほとり。

ぎよしゆう そろろう しのぎ
漁舟滄浪ヲ凌キ

滄浪・・・青々とした浪。

そぼく こうそん もら
疎木江村ヲ漏ス

江村・・・大河または入り江に沿った村。

き がんさい ほう ちま
寄願賽報ノ巷々

しのうらい けい あと
士農来詣ノ跟

来詣・・・「来る」ことをうやうやしくいう語。

せんねん ふきゆう き
千年不朽ヲ期ス

ばんせい はんもん よみ
萬世繁門ヲ嘉ス

嘉す・・・よいとしてほめる。

てんなんさんねんみずのとい はるさんがつけかん
天和三年 癸亥春三月下澣

天和三年・・・一六八三年 下澣・・・下旬

どうゆうけんせん
洞幽軒撰

撰・・・詩文をつくること。

神明町の会田七左衛門家所蔵・天和三年の「越谷神明縁起」

平成二十八年八月 解説 加藤 幸一